戦後教育史学習会ニュースNo.54

市民学習会：第 53 回戦後教育史を学ぶ
関山禮子さんのライフヒストリーを聞く

人間として生きる―響きあう子どもたち―

〒371-0026 群馬県前橋市大手町 3-1-10　教育会館内　TEL＆fax027-235-8876

‘08. 11. 11（火）発行　群馬県高校教育研究所発行：編集/橋本寛文

10 月 11 日（土）午後 1 時半より群馬県教育会館で、標記のテーマで関山禮子さんのライフヒストリーをお伺いしました。足尾に育った関山さんは桐女での素敵な先生の授業に憧れました。いつかは教師に！採用試験に合格はしたものの４月１日になっても通知が来ず、僻地を希望したのに、決まったのは養護学校。言葉にならない言葉を必死に書きとめ１０冊も文集を出しています。重度脳性マヒ児に自分から周りの働きかけることでおしゃべりが出来るように…。筋ジストロの子どもたちは不安から荒れていました。彼らの中の仲間との固い絆、優しさを発見し、寄り添うことで「日曜日に学校へ行きたい！」というまでになりました。後半の特殊学級では時間をかけ、丁寧に接することで子どもの要求を引き出します。最後の勤務校で、自閉症の琢ちゃんとの素晴らしい出会いが待っていました。お忙しい方は、**5.響きあい** 22 頁の(2)かえるはなえるからお読みください。尚、正確さを期すため加筆・訂正、付記があります。

目　次

1.「四月一日付にしてやる」
(1)一本道しか知らなかった私……2p
(2)「四月一日付にしてやる」……3p
2 ターちゃんの言葉を聞き取りたい……5p
3.この子らに言葉を… ……7p
4.生きていることを確認させていくこと
(1)かくれんぼやった……10p
(2)仲間とのつながりのちから……12p
(3)探究心に応えていくこと……14p
(4)作文の会との出会い……15p
5.響きあい
(1)物語絵「ふわり大男」……19p
(2)かえるはなえる……22p
(3)ともだちとのかかわり……29p
(4)ニコニコ笑っている顔が好き……31p
6.ノーマライゼーション……32p

1.「四月一日付にしてやる」

(1)学校までの１本道しか知らなかった

平野:関山先生は足尾銅山でお生まれになり、田畑などは余り見ないで育ったとのことでしたが、どういうところだったのかからお話願えますか。

関山:足尾に生まれ、高校から桐女に通い、群馬大を卒業しました。それ以来ずっと群馬で生活しているのですが、私の言葉はイントネーションが群馬とは違います。何時までたっても直りません。足尾は桐生と近いのですが、栃木県ですので、栃木弁なのですね。最近は交通の便が良くなり日光に出られますが、当時は桐生でした。足尾は足尾銅山でもっている町で、一時は市に昇格しそうなほど人口も増え、活気があり賑やかでした。今は廃鉱になりまして、観光で見せるくらいで廃屋も多く、寂れた町になっています。奥の山地は亜硫酸ガスの所為で禿山になっており、植物も育たない状態でした。

平野:子ども心にもそういうことは意識していたのですか。

関山:鉱山の町だということは分かっていましたが、公害の意識はなかったです。庭にはお花が咲いていましたが、狭い土地柄でしたので、田畑がないのを特に不思議には思いませんでした。「ガスが来るぞー」と通報があると、みんな慌てて草花の上に新聞紙を広げたのをかすかに覚えています。風の向きで谷間を流れてきた亜硫酸ガスで 2、3 メートル先が見えなくなるくらい濃霧の状態になってしまいます。

平野:公害という言葉が普及する前の時代のわけですね。

関山:中学校の時代に鉱山にタンクが出来、校長先生が朝礼で「これからはガスは来ません。タンクは出来たのは大変なことなのです」とおっしゃったのを記憶しています。

平野:そういう所で生まれ育ったのですが、高校は桐生女子高にお通いになられ、そこで教師になろうという出会いがあったそうですが…。

関山:そんなに大げさに教師になりたいと思ったわけではないのですが、『徒然草』を始め古典文学の数々を情熱的に語ってくださる国語の先生がおられました。あぁ、素敵だなぁと思いました。もう一人、数学の先生が整然と教えてくださるのにも感動しました。知的好奇心を満たしてくれる教師に憧れを持った最初でした。

平野:それまでは、具体的には余り考えていらっしゃらなかったのですね。

関山:私は、ただただ学校の勉強ばかりをして過ごしていましたので、将来の仕事について考えることはなかったように思います。これは家庭環境にも一因があったように思います。というのは、父は独学で電気技師の資格を取ったのですが、大学を出ていないということから苦労したそうで、子どもたちだけは大学を出したいという願いがあったようです。

平野:勉強しろ、勉強しろとうるさかったのですか。

関山:しろ、しろとは言わないけれど、遊んでいて帰りが遅くなると家に入れてもらえなかったとか、父の宿題があったり、寝るときもお話を読んでくれるというよりも算数の鶴亀算を出されたりとか、（大笑）

平野:やはり、教育熱心だったのですね。

関山:中学校では模擬試験の順位を科目ごと、総合も 1 位から 10 位まで名前を校舎に貼り出していました。父は「高校受験の問題集を何冊も買ってやれないから」といって、やり終わると全部消しゴムで消してくれて、それもやり終えると、マジックインクで消してと、同じ問題集を 3 度も 4 度もやりました。（笑）

平野:進学熱心だということは、活気ある町と関係があったのかもしれませんね。で、群馬大の学芸学部に進学されたのですが、高校の教師を目指そうとは思わなかったのですか。

関山：子どもに何かを教えたり、育てたりしたいと思っていたので、その点は余り意識していなかったと思います。

大学へ入るまでは受験勉強をひたすらやっていました。桐生まで電車で 1 時間半かかるのですが、余所見もしたことありませんでした。学校までの一本道しか知りませんでした。他の道を通ったのは教科書を買いに本屋に行ったときくらいです。映画教室があったのですが、1 時間半もかけてもったいないというので休んでしまうくらいでしたね。（笑）それでも、受験勉強をしながらふと、これは何の役に立つんだろう、こんなことを一途にやっていたら狂ってしまうのではないか、などと思ったことがありました。大学へ行ったら二度とこんな勉強はしないぞと思っていましたね。そしたら、大学ではそれだけじゃなくて本物の勉強を探せばよかったのに、全くしないで終わってしまったようです。（大笑）

周りの友達からも言葉が変だといわれましたし、教員になるのだからアクセントやイントネーションを直さなければと放送部に入りました。これが大変でした。一から十まで直されるのです。それで、すっかりカチカチになってしまい、日常の会話も怖くて出来ない有様で、修飾語をいっぱいつければ通じると辞めてしまいました。丁度その頃、身体を鍛えておかなければと思い立ち、卓球部に入りました。高校時代は帰宅部でしたから、初めてのクラブ体験です。卓球を通じてのおしゃべりが楽しく、それで大学時代は終わってしまった感じです。

(2)「四月一日付にしてやる」

平野:それで教員採用試験を受け無事合格したのですが…、

関山:二次試験の面接で、どこが希望か聞かれたものですから、足尾に一番近い勢多郡東村の沢入（そうり）（現みどり市東町）が僻地になっており、僻地教育をしたいですと言ったら、「珍しいね（笑）それならすぐに入れるよ」と言われました。うかつに

も私はその一言で採用が決まったと思い込んでいました。それで、通知が来るのをずっと待っていたのですが、三月の末になっても通知がありません。暢気な私も流石に不安になっていましたら、四月一日に父が隣の沢入にいって新聞を買ってきてくれて、「お前の名前が載っていない」というのです。（大笑）実は、連絡がないので教育委員会ってどんなところなんだろう、通知がなければ採用されたのかされないのかわからないから、他に手を打ちようがない、とだんだん腹が立ってきました。でも、何とかしなければなりませんので、4月5日に産休補助でも何でもいい、教員になれればという思いで桐生市の教育委員会を訪ねました。事情を話したら「あんた、履歴書は出してあるかい？」と聞かれ、人事の方が書類を持ってきたら確かに私の名前があったのです。それを見て驚いたのですが、名前の下に推薦欄みたいなのがあって、誰校長の娘とか誰教頭の子息とか書いてあるのです。（爆笑）私のところは空欄になっていました。「あんたは足尾だろ、あそこは労働者の町だから組合活動が盛んだろう」といわれたのです。当時の私にはそういう事情は分かりませんでしたから、「よく分かりません」と言いました。すると人事の方が「あんたはよい子だね。（爆笑）養護学校に一人新採用することになっているから、四月一日付にしてやるからそこへ行きな」と言われ、書類を書き始めました。そこに家から電話が入りました。沢入に決まっていた方が下宿を探しに現地に来たら余りの田舎にびっくりして辞退したから空きが出来たのでどうかという連絡が入ったというのです。で、父が交通事故にあったからと言い訳して書類は未完のまま飛んで帰りました。東村教育委員会に行き、事情を話したところ、「それじゃ採用できない」と断られてしまったのです。理由は、当時山平交流が行われていて、僻地から都市への希望者が沢山おり、桐生の教育委員会で採用が決まりかけている人をこっちで採ってしまうと東村からの希望者を出しづらくなってしまうというのです。がっかりしましたが、最終電車で桐生に戻り、人事の方の自宅を訪ね、「何とか沢入でお願いします」と懇願したのですが、書類を受理してしまったから駄目だといわれ、4月5日、「四月一日付」で桐生第一養護学校へ就職しました。ここは現在は県立あさひ養護学校になっています。

平野: （笑いながら）無事めでたく、4月5日に「四月一日付」で就職できたわけですね。

関山:はい、恩着せがましくです。そのときは分からなかったのですが、後で聞いたところ、五日付と「一日付」ではずいぶん違うのだそうです。

2.ターちゃんの言葉を聞き取りたい

—桐生第一養護学校 1968年から—

平野:ということで、考えても見なかった養護学校に決まったわけですが、それをどのように受け止めておられましたか。

関山:予備知識もないし不安でしたが、就職できたこと、子どもを教えられるということでもう胸がいっぱいでした。肢体不自由児とか知的障害児に関るようになることまで気が回りませんでした。6日に登校して翌日は上靴も持たずに新任式に臨みました。子どもたちは各自寝そべったりハイハイしたり、中には椅子に座っている子もいましたが。でも、子どもを育てる仕事に就けたという思いでいっぱいで、涎とか臭いなど気にもなりませんでした。というより、そこまで気が回らなかったのですね。

挨拶をするので名前を呼ばれました。パッと立ち上がったのはいいのですが、学校で借りたスリッパが折りたたみ椅子にかかとが挟まっていたらしく、勢い余って前のめりに転んでしまったのです。そしたら、子どもたちがワーッと笑い転げ、慌てた教頭先生が「静かに！静かに！式ですよ、式ですよ」と鎮めるのです。それがすごく滑稽なのと子どものあっけらかんとした姿に、私が笑われていることも忘れて、思わず「素敵な子たち、良い子たちで、あぁ良かった」と思ってしまいました。（大笑）

平野:前向きな人ですね。

関山:今になって思えば、これが私の教師人生を象徴しているというか、集約されているように思えます。これが、その先の私を支えてくれたのだと思います。

というのは、私はどちらかといえばこれまで気取って生活をしてきたのですが、デーンと転がったおかげで素に戻れたというか、こういう生き方が私には似合っていると思えるようになったのです。

平野:いまさら気取ってももう手遅れですよね。

関山:そのころは、養護学校には若い教員がいなくて、年配の方が退職寸前に来るケースが多かったみたいです。20代は私一人、その上は40代の方でした。でも4、5年の内に養護学校のシステムが変わって若い人でいっぱいになりましたね。ですから、子どもたちは私が若いということで受け入れてくれたのかもしれません。

平野:桐生市には二つの養護学校があり、62年に第一は肢体不自由、第二は知的障害となったのですね。できたのは60年ですから、まだ8年しか経っていなかったですね。基本的には両毛整肢養護園の子どもたちのために作られたようですね。

肢体不自由の子たちはそれまでは基本的には就学免除となっており、この子たちに対する教育をどのようにするかの蓄積は余りなかったのですね。

関山:私にとってはそれも幸いしたのかもしれません。知的障害のほうは歴史があるのでカリキュラムも出来ていたのかもしれませんが、肢体不自由児の場合は歴史が浅かったので、ポリオの子もいて、それから、脳性麻痺の子が増えてきていたので、障害の起こった箇所によって出方が違うものですから、まだ対処法がよく分からない時代でした。ですから、カリキュラムもないし、自分でその子に合ったものを見つけだすのが大事でした。

平野:新人の1年目のスタートはどのように切られたのですか。

関山:三年生14人の子を担当しました。多いように思われるかもしれませんが、知的には何の障害もなくてポリオで片手、片足という子もいたし、脳性マヒで歩くのも大変という子もいますし、知的に低い子、でも歩けない子は二人だけでした。

平野:話すほうではどうでしたか。

関山:ターちゃんという言語障害の子が一人いました。後は言語的には大丈夫でした。

平野:そういう条件の違う子たちを一人で14人見たわけですね。

関山:校内研修の時には、この子にはこう、あの子にはこんなふうにやっていますとすごく大げさに、気負いもあったのでしょうね、いろいろの実践を報告していました。そういうことが許される職場の雰囲気があって、ウチのクラスの子たちに関しては私が一番分かるんです、というように主張できる学校だったのです。

平野:一年目の新人への援助みたいなものはなかったのですか。

関山:ありませんでしたが、堂々と言わせてくれてやらせてくれました。それが指導だったのですかね。よく分かりませんが…。

ターちゃんの言葉に関してですが、私はどうしても聞き取りたかったのです。そのためにメモを取り始めました。丁度桐生市では「言語治療教室」が開かれ、学芸大で言語治療の研修を受けてきた先生がその普及に当っていました。そこで、私も応募して週1回午後から研修を受けました。でもそこは、吃音とか構音障害（発音が正しく出来ない症状）の子が中心でしたので、脳性マヒの話をしても「それは知的障害ですから」と取り合ってもらえませんでした。それでも2年通いました。

なんとしてもターちゃんの言葉を聞き取りたい。当時は独身で時間の余裕がありましたし、子どもたちは施設の子ですから夕食をとってから学校へ遊びに来てもらったり、私のほうで施設に出向いたりと9時の終電までは学校にいました。おしゃべりしたり録音を採ったりしていました。で、ターちゃんの言葉を書いていたら、他の子が「オレの話も聞いて！」というものですから、書いてやると、オ

レも俺もと放課後学校へ遊びに来るようになっていました。でも、みんなの言葉は書ききれませんから、「それじゃ、みんなも書いてごらん」と書かせたのが、作文の始まりでした。私はただ、子どもたちの言葉を書き取るのが楽しくって、3年間で10冊の文集を出しました。今は散逸してしまったのですが…。

養護学校の子たちを見ているとき、丁度足尾でお祭りがありました。同じ年齢くらいの子が白粉塗ってお飾りしてシャランシャランと街を練り歩くのです。それを見ていたら涙が止まらなくなりました。この子たちは何もしなくたってきれいで、動けるのに町中の人が見てくれて、私の受け持っている子たちは町外れの施設に入れっぱなしにされて、それでも一生懸命に生きているのに、ひとつも陽の当るところにいなくて、「どうしてみんなが見てやれるところにこの子たちを置いてやれないの！」と思うと涙が止まらなくなったのです。ですから、この子たちにはいろんな経験をさせたいなと思いました。本当に普通の生活を楽しませたい…。

3.この子らに言葉を… 1971～

平野:そういう生活を3年間、桐生第一養護で送られ、その後、転勤したのですね。

関山:「三年誓約」というのがありまして、町場で三年いましたら、次は僻地へという誓約を取られていました。私はその年の3月に結婚することになっていたのです。校長先生が結婚するのに僻地は大変だろうと思いやってくださいまして、前橋養護へ転勤させてくれました。養護を希望したわけではないのですが、そこなら通勤しやすいからということでした。

ここは知的障害の子たちの学校で、中学部はあったのですが、小学部は出来て2年目でした。ですから、ここも開拓途中の職場でした。大きなお腹で通勤したことを覚えています。

平野:異動してお腹が大きかったのですか。

関山:いえ、結婚して半年して大きくなりました（大笑）。今度の子どもたちはきょときょと動き回る子たちで、8人の子たちを二人で見ました。私は低学年5人でした。ホントにチョロチョロ動き回る子たちで、何を考えているんだろうとびっくりしました。前は動けない子たちでしたからね、その落差に驚きました。あっちゃんは飛び跳ねながら「ハト、アソンダン。ハト、アソンダン。ハトマメ、ハトマメ」と一日中繰り返すのです。就学猶予を一年やってきたみいちゃんは「あぁ、あぁ、あぁ」ばかり。親指の根元をしょっちゅうしゃぶっているので、そこが爛れて穴があいてしまっている。すぐ叩くし、暴力がすごい、噛みつきみいちゃんです。この子たちは落ち着かないで、しょっちゅう教室を出て行ってしまうし、この子たちは何を考えているんだろうと思いました。

そうだ！よく話を聞いてやろう！とりあえず、言葉を伝えていこう！言葉を話させたい。で、朝の 1 時限目はいつもお話の会にしました。「ハト、ハト」「あン、あン」しか言わない子たちですが、「きのうはどうだった？」「きょうは何を食べてきたの？」「ハトとどうしたの？」とか、お話をじっくり聞いたのです。そして、少しでも今までと違うことを言ったらすぐ書きとめました。

平野:それは、桐生の 3 年間が土台になっているのですね。

関山:で、それらをその日のうちに印刷して渡してやると、何人かは字が読めますから、「ほら、信ちゃんの言った言葉だよ。ほらね。こういったでしょ。」と一緒に読んだり、みいちゃんは字が読めませんから、イチゴのマークで「ほら、みいちゃんのはここにあるよ」とおしゃべりをしました。すると、「あぁ、あん」しか言えなかったみいちゃんがだんだんと「アンネ、アンネ」と 24 回も言いだしたのです。そのつばを飛ばしながら言う姿に何か言いたいのだけれど「あんね」しか言えないもどかしさ、何とか言葉を獲得させたいと思いました。あっちゃんの「ハト、あそんだん、ハト、マメ」しか言わない言葉を毎日私が書いて渡して読むのをみいちゃんは見ていて、「自分のも聞いてよ」と思ったらしいのです。猫を見て「アンワン、アンワン、」と言い出し、ついには「タマ、マンマ　パチャパチャ　ママ　ごあん。タマ（ジェスチャーで）ひっかく　おっぱい　ある。あし　ある　め　ある　べろ　ある　ニャーオン　なく　こたつ　ねる」と聞き取りずらい言葉ですが、言うようになりました。

言わないと「あっ、みいちゃんのお話終り」と私が別の子の方を向いてしまうので、一生懸命通じそうな言葉を次から次へと並べるようになりました。そういう中で、3 学期だったでしょうか、みいちゃんが「ケンカ」と言ってはなしだしたのです。

「ケンカ」
けんか　けんちゃん　ないた。
エーン　エーンって
みーちゃん　おばちゃんに　こーに（げんこつであたまをぶつまねをする。）
げんこつ。
けんちゃん×（手で×を書く）
みーちゃん　○
おばあちゃん×
みーちゃん　けんちゃんのこーに（あたまたたいた。）
けんちゃん×だー。
けんちゃん　みーちゃんのこ
「しんぶる」だって。

最後のけんちゃんがみいちゃんのことを「しんぶる」と言ったといいましたが、けんちゃんは「しんぶる」といったのではなく、別の何かみいちゃんをバカにするような言葉を言ったのかもしれない。

それがみいちゃんには「しんぶる」と聞こえたのだと思います。いつもいつもそういわれているみいちゃんが「しんぶる」と言う言葉に反応して、だから叩いたんだよ、それをおばあちゃんは分からないんだから×なんだよ、みいちゃんは○、悪くない。けんちゃんが×、悪いんだと、みいちゃんは口で抗議を主張出来る子になったのです。すごく嬉しかったですね。それまでは言葉の代わりに暴力で表現していたのです。それは単なる乱暴ではなかったこと、周りの人に分かってもらえたことで、みいちゃんはしゃべることに一生懸命だし、親指の根元をなめることもなくなったのです。それまでは舐めるのを止めさせようとして、塩をぬったり、芥子をぬったりいろいろやってみたのですが、みんな駄目だったのです。ところが、自分で言ったことを聞いてもらえるようになったときに、全く舐めなくなり、爛れがきれいに治っていました。

それから「ハト、ハト」と言っていたあっちゃんも 3 学期には「せんたくやさん」を書きました。

せんたくやさん
おとうさん　せんたくしてるん
ギーってしてるん。
あらってるん。
せんたくきで　あらうん。
ギーってゆうん。
しごと　いくん。
じてんしゃで　いくん。
「ただいま」
っていくん。
アイロン　かける
「よーいしょ　こらしょ」
ってかける。
シャツ　きれいになるん。
　あっちゃん　こたつにあたってるん。

「ハト　あそんでるん」としか言わなかったときのあっちゃんは、多分、私のほうが聞く態度が出来ていなかったんだと思うのです。きっと、あっちゃんには「ハト　あそんでるん」にもいろいろあったんだと思うのです。「ハト」にもいろいろあっただろうし、「あそんだ」の中にもいっぱいあったんだろうけれど、関りの浅い私には聞き取ることも思いやることも出来なかったので、「ハト　あそんでるん」で話が切れてしまっていた。

だんだん関りを持てるようになると、ホントは言いたいことがいろいろあることが分かってきました。6 歳なら 6 歳で、キョトキョトしている中にもただキョトキョトしているのではなく、6 歳なりの人生観をもって見ていたのだと分かってきたのです。それをどう相手に伝えるかという方法と、聞いてくれる関係が出来てなくて出し切れなかったということをあっちゃんやみいちゃんに教わりました。

平野:でも私たちには書いてあるから分かりますが、おそらく現場にいても関山先生でないとこのようには聞き取れないと思います。先生以外にここまで聞き取

れる人はいなかったんじゃないでしょうか。これだけの“通訳”が出来るようになったこと自体がすごいと思います。子どもたちも聞いてもらっていると思うからだんだん中身が豊かになっていますよね。で、中身が豊かになっていくから逆に聞き取りやすくなったという相互作用があるかもしれませんね。このことは研究者が観察しているだけでは決してみえてこないことで、実践しているからこそ見えてくることだと思うのです。障害者教育ではこのようにして切り開かれていくことは多いのではないでしょうか。ですから、このような環境の中で教師としての土台を作られたというのは貴重な体験だったと思いますね。

関山:読みすぎ、聞きすぎもあるかもしれませんが…。

平野:ところが、前橋は 1 年でまた転勤になるのですね。

関山:私は前橋養護のときに妊娠して、私と交換に桐生第一養護に移った先生も妊娠して、私は桐生から前橋へ彼女は前橋から桐生へ上毛電鉄で通っていましたから、いつも樋越のあたりでお互いに手を振って（大笑）すれ違っていました。彼女はつわりがひどくって、お休みするようになってしまいました。これは大変だということで、組合が動いてくれてもう一度素取替えすることになりました。で、四月一日に辞令をもらって即、産休に入ったのです。（笑）

平野:今度は桐生第一養護には何年間いたのですか。

関山:8 年間です。

平野:それでは、ここでいったん休憩を取り、後半にメインのお話を伺うことにしたいと思います。

*********≪休　憩≫*********

4.生きていることを確認させていくこと

(1)かくれんぼ　やった　1974 年～

平野:再開します。産休明けに出会った子どもたちの話からお願いします。

関山:最初の半年は“担外”ということで担任しなかったのですが、翌年持ったのが最重度の脳性マヒの一年生 4 人の子どもたちでした。その頃はこんな重度の子はどこの養護学校にもいなかったと思います。

平野:具体的にはどんな状態だったのですか。

関山:3 人が寝たきりで、指先で眼元を触って（アカンベーの形）「いいえ」、指を開いて（パーの形）で「はい」の反応をするだけでした。ひとり、たかこちゃんはハイハイはできるが言語は駄目でした。みんな「あ、あ、あ、あ」だけですね。それで、座れる格好にしてあげるとか、足だけでも少し動かせるようにしたり、文字盤で字を指したのを「はい」「いいえ」で答えさせたりしました。隣のクラスにも、二年生でしたが重度の子がいま

したので、2クラスで合同の時間を作ることになりました。

平野:合同クラスにしたのはどうしてですか。

関山:一人の教員がずっと見ていると息苦しくなることとゲームなどを取り入れようというので一日１限ですが、一緒にやりました。ところが、３ヶ月も経つと私が窮屈になってしまったのです。ホントにこんなことで、例えばストローで水を飲む競争をするのですが、吐くばかりで吸えない、これを訓練と称してやっていていいのだろうかという疑問を持ったのです。出来ないことをやれやれと競わせることが教育なのだろうかと思うと苦しくなってしまいました。私のしなければならないことが他にあるのではないだろうか。「はい」「いいえ」だけでは受身なだけ、自分から働きかけたい、伝えたいと思うこと、そういうふうにさせることが教育ではないか、楽しいとかこう思うとか、こうしたいと伝えたいと思うようになることが生きている証、人らしく生きることではないだろうかと思ったのです。それで、いつものパターンですが、話を聞くことを始めたのです。面白がることをやり始めました。でも、最初の１年くらいは一人芝居のような状態でしたね。「おはよう」と言っても向こうは何も言わないし、面白いことをいったりやったりして自分だけで笑っている。（笑）ふと気がつくと、子どもたちは寝転がって冷たい目で私を見ている。（大笑）

でも、だんだん彼女たちの中にも動きが見えるようになっていったのです。お話を読んでやるとすっごく喜んで、もっともっとと要求するようになりました。

あるとき、たかこちゃんが自分で文字盤を持ってきて「あ、あ、あ・ん、あ、あ」と指したのです。１年目の最後の頃でした。何が言いたいのだろう？そして自分の胸を手で叩いたり、お腹の辺を触ったりするのです。で、ハッと気づいたのが、たかこちゃん家のお母さんが面会に来たときにお腹が大きかったことでした。もしかして、赤ちゃんのことなのでは？

平野:なんでそれを赤ちゃんだと思ったのですか？　（笑）

関山:なんでかは分からないけれど、そう感じたのです。で、「あかちゃん！？」と言ったらニッコリ笑って肯いたのです。また“あ”を指して、胸を叩くことを繰り返します。「あたしん家？」と聞くとまたニッコリ。という具合にして分かったのが「あたしんちのあかちゃんがうまれた。あ（お）んあ（な）のあかちゃんだよ」と分かったのです。「あぁ、そういうこと、すごいね」。家から離れて生活していて、おかあさんは赤ちゃんを産んでそっちに気持ちが行っちゃってるだろうに、そんな中でも、自分は施設にいても自分の妹が生まれたことをこんなにも喜んで、他人に初めてその気持を文字盤ででも伝えようとしている、いつも私が聞き出すという感じだったのが、自分

から伝えたいと思う気持になったなんて、なんて素敵な、優しい子なんだろう。お姉ちゃんになるってことはこんなに素敵なことなんだと感動しました。

平野:ここまで通訳できたなんて神業に近いことですよね。よく分かったなって…。

関山:いえ、一緒にいると分かるんですよ。言いたいことが一つでも正しく伝わったことで次の展開がぐっと違ってくるのです。自分の言いたいことが次々と出てくる。やりたいこと、行動も積極的になって、二年生になるとかくれんぼまでするようになったのです。私が朝教室に行くと、たかこちゃんがいなくて、ハイハイして隣の教室にもぐり込んでいるんですね。低い机の下に頭だけ隠しているんです。自分では隠れているつもりなんでしょうね。すると、動けないみー君までかくれんぼをするようになったのです。私もそれに合わせて「あれ、きょうは誰もいなくてどこへいっちゃんたんだろう」と大げさに騒いでみせる。

平野:寝たきりの子がかくれんぼしようと思うなんてすごいことですよね。その気にさせたこと自体…

関山:たかこちゃんがみー君やたかひろ君に毛布を顔の傍にかけてやると顔をその中に隠そうとしたんです。

かくれんぼをやった　　たかこ

せきやまれいこさまと　みのるさまとしもださまと　わたしがやった。

あたしは　となりのくみのきょうしつのつくえのしたにかくれ　せきやまれいこさまは　もうふのなかにかくれた。

みのる

ぼくは　たかこのつくえのしたにかくれました。　ぼくは　オルガンのうらにかくれました。

生まれてから一度もしゃべったことのないみー君がこの頃から“おしゃべり九官鳥”と言われるくらいしゃべってしゃべって止まらないくらいのおしゃべりになってしまいました。しゃべれる機能がなかったのではなく、しゃべる必要とか気持がなかったのだと思います。こういう友だちとの関りの中でかくれんぼしたいという気持になったり、しゃべりたいという気持が出てきたりしたのです。

(2)仲間とのつながりのちから

関山:次の年（1975 年）、担任したのが筋ジストロフィー症の子 4 人を含めた 7 人の四年生のクラスでした。その頃は養護学校でも筋ジストロフィーの子は少なかったのです。それなのに、この学年だけかたまっていました。

平野: 筋ジストロフィー症の子はこれまで経験してきた子たちとは違いますよね。

関山:そうです。普通学校を経験してきた子もいました。爪先立ちで歩くようになったり、転びやすくなったので“筋ジス”と診断され転校してきた子です。普通学校で走り回ったり、騒いだ経験を持つ子たちですから、自分が不自由になって歩けなくなり、ハイハイしなければならない段階にあるというのは、普通の発達と逆行しているわけで、すごく荒れたのです。ですから、やることなすことが粗暴で乱暴で、気に入らないとすぐふてくされるし、集中しないし、面倒くさがるし、ちょっと目を離すとケンカ、尿瓶でオシッコを採るのですが、そのオシッコを引っ掛けあったり、教室で飼っているカタツムリを窓から投げ捨てたり、勉強も分からなくなると「こんなめんどっちィものやってられるか。わかんねぇ、しらねぇ。」と物指、コンパスなどを突きつけることもありました。あるときなど、重度の子を踏みつけて「おめぇなんか、ボケ、死ンジマエェ」と暴言を吐いた子もいました。もちろん、こっちが「お早う！」といっても返答なし。勉強に向かわせることは至難の業でした。成長に逆行しそれを意識し死をも感じているこの子たちには何をやったらよいのだろうか。この子たちに、勉強は必要なんだろうか、私は何を教えればいいのだろうかとすごく悩みました。かわいそうな子と見る暇なぞありませんでした。夢中でぶつかっていました。

そんなあるとき、すごく逞しく遊ぶ彼らに気づきました。私が教室を留守にした休み時間、窓を閉め切って黒板消を叩いて煙幕ごっこをして遊んでいました。みんなゴホゴホして咳きこみながら夢中で遊んでいたのです。でも、ふと自分たちが捕ってきたタナゴの水槽を見ると、ちゃんとダンボールで蓋をしてある。

＜びっくりの歓声＞

椅子や習字の道具やあらゆるものを入り口に積み上げてのバリケード作り。初めの内は「なんだこんなもの」と言いながら、難なく教室に入れたのですが、だんだん凝ってきて、ドアに穴を開けて釘まで刺して、どんどん積み上げの高さも高くしていったのです。そういう遊びのときは緘黙で首を振るだけの子、何か言われるとすぐおどおどしてしまう子、真面目で融通のきかない子まで含めて全員でしているのです。しかも、最後には自分たちも出入りが出来なくなってしまった。（笑）トイレに行けない。（大笑）どうしたと思います？タナゴの水槽を掃除するためのホースの一方をスチーム暖房の鉄管と床の隙間に差込み、全員が排尿しているのです。こういう仲間のつながりというか、創造力（といっても、オシッコすることだけ、釘の穴を開けることだけなんですけどね）（笑）、そういう知恵とか実行力、タナゴにかぶせる優しさ。こういうのが本当の子ども姿だ。スゴーイと思っちゃったんですね。きっと、普通の子は教室に押し込められてただお座りして勉強していると（私が思い込んでいただけですが）そ

ういう子たちよりも荒れてふてくされているこの子たちの中に本当の子どもの姿を見たように思いました。それで、この子たちに「これが本当に生きていることよ、これがあなたたちのいいところだよ」ということを確認させていくことが私の仕事ではないかと思ったのです。

それには、ただ「いいよ、いいよ！もっとやりな！」ではなく、自分で確認し、後に残ることをすることが大事だと思ったのです。それで、しゃべったことをまたいつものように書き始めました。

(3)探究心に応えていくこと

関山：そうしたあるとき、廊下をアメリカシロヒトリが這っていたんです。すると、アキオとかずおがそれを観ていて教室に入ってこない。「さぁ、勉強しよう」と呼びかけたのですが「ケムシだケムシ。」と言ってきかないので「じゃぁ、あんたたちはケムシのことを書いてなさいよ」と言って画用紙を貼った画板を持たせ放っておきました。しばらくしたら、「先生動かしてくれ」と叫ぶのです。行ってみたら毛虫が動いてしまってよく見えないから見えるように身体を動かしてくれということだったんですね。抱っこして動かしてやることを何度かしたのですが、そこで書いた文が「ケムシって速いな」だったのです。私たちにとっては毛虫の動きは決して速いものではありませんが、彼らにとっては自分と較べて「速い」が実感だったのでしょうね。こういう潜って発せられた言葉は実感がこもっていて響くなぁと感動しました。

また、あるとき、蜂の巣事件というのがありました。同僚の先生がスズメバチの大きな巣を自分のクラスの子に見せるために学校に持ってきたのです。それを、「あなたのクラスの子のほうが興味がありそうだし、響くだろうから貸してやるよ」と言って先に貸してくれたのです。教室へ持っていこうとしたら、丁度歩けるリエちゃんが通りかかったので、「これ教室に持ってって」と持たせたのです。私は、せっかく貸してくださったのだから、子どもたちに蜂の巣の話をしようと思って、図書館に辞典を取りに行き、教室へ行ったら、机の上にあったのは無残に解体され、葉っぱだけが散らばっている蜂の巣の残骸でした。びっくりして口も利けません。ただ、真っ青になって呆然と立っていました。そしたら、子どもたちが私の態度におどろいてしまったようでした。いつもなら怒るのに黙ったままでしたからね。しばらく気まずい沈黙があって、私が「これスズメバチの巣なんだよ。これについて書きな！」って紙を渡しました。すると、黙々と書き始め、休み時間になっても続けました。書きあがったのを読んだら、蜂の巣ってすごいんだな、剥がしてみたら葉っぱが出てきたけど、あの葉っぱはどうやってくっつけたんだ、蜂の口のどこに糊があるんだ、糊じゃないとしたら何なんだろう、そういうことがどこどこどこどこと書いてあ

るのです。私は反省文みたいなのを書いてもらえれば（大笑）、貸してくれた先生に「申し訳ないんだけれど」といって渡せると思って書かせていたのですが、反省どころか「なんだ、どうなっている？」そういう言葉だけだったんです。でも、この文を読んで私はすっかり感動してしまいました。子どもってこうやって物事を追及していく、追及しようとする気持が大事、そうだよなとへんに感動してしまったのです。で、その文をもって、貸してくれた先生のところへ持っていって、「ね、ね、これ見て！いいでしょ。」と渡し、他の先生方にも見せ歩いてしまったのです。子どもたちが壊してしまったのに「子どもってこうだよね」と見せ歩いたのですから、顰蹙ものですが、その同僚に叱られた覚えがありませんから、許してくれたのですね。そう勝手に思っています。（大笑）

でも、私は感動してしまって、彼らに蜂の巣のことは話をしませんでした。後で勿体ないことをしたなと反省したのですが、私の仕事は探究心を起こさせることと同時におきたその心に応えていくことなのだと気づいたのです。

(4)作文の会との出会い

関山：たまたま、「作文の会というのがあるよ、あんたは何年も何年も作文を書かせて一人で喜んでいないで、紹介してやるから行って来てごらん」と先輩に言われて「蜂の巣」の作文を持って初めてサークルに参加しました。そうしたら、私の持参した作文を読んでくれて、「いいね」と言ってくれたのです。で、すっかりいい気分になって、桐生支部教研の作文の分科会に出てみました。3 人しかいませんでした。年配の先生が「私は結婚式の仲人があって行けないから、関山さん、『蜂の巣』をもって県教研へ行ってきな」と言われたのです。県教研に参加し、自分の分を報告し、帰ろうとしたらちょっと待ってなさいといわれ、最後に全国教研に行きなさいということになったのです。（笑）世の中に一歩でた途端に全国教研です。

ところが、子どもたちの症状が進んで、また粗暴になっていきました。いったんは書くことでエネルギッシュになり、乱暴なことはなくなったのですが、どうしてなのでしょう、こんなことでは全国大会に出られない。

でも、ここでも「蜂の巣」を読みました。幼い文と拙い発表にもかかわらず、「これには作文の原点がある」などと評価され、びっくりしました。

全国大会は京都であったものですから、帰りに瀧口寺に寄ってみました。古ぼけたお寺で、入場料も僅か 70 円でした。解説役のおばあさんが、煤けたような掛け軸を前に一生懸命説明してくれました。瀧口入道と横笛のお話です。張子の横笛を持ちながら、全身全霊を打ち込んだようにロマンを語るのです。このおばあさんの熱に私はすごく打たれました。最初

は汚い身なりのどこにでもいるおばあさんに見えたのが、話を聞いている間にきれいなおばあさんに見えてきたのですから不思議ですね。（笑）命がけのように横笛と瀧口入道の話を語るその姿に感動しました。

私は、帰るとすぐに、その話を子どもたちに語って聞かせていました。（大笑）子どもたちはすごく喜んで、感動したみたいですよ。「全国大会に行って、みんなの作文を読んだら、全国から集まった先生たちが素晴らしい作文だと褒めてくれたよ。」と言うと、「そうかい、俺たちの作文はそんなにいいかい」というような顔をして聞いていました。そして、それからはまた落ち着いて書いたり動くようになっていきました。

私は、それからはいろいろなサークルに参加して吸収して行きました。作文を書くだけでなくて、子どものいろいろな要求に応えていくのが教師の仕事、私は仕事の答えが見つかったような気がして、「文学の会」があればそれに参加し、「動く芝居」を見せてもらうと借りられるようにお願いしたり、今思うとかなり図々しいことを次々やったのです。それに、若い仲間が増えてきていましたので、一緒に勉強会をするのが楽しくなりました。授業で分からないことがあると、大物の先生に電話をかけ、教えてもらったりもしました。

そういう中で、アキラが書いたのが「木の芽」です。この子は兄さんが重度の“筋ジス”で、本人も緘黙でこの作文を書くにも２時間かかって題だけ、うちに帰って１行だけ書いてきて、そして学校へ来てその続きを書くということで、何時間もかかって書き上げたものです。

木の芽　　晃

ぼくのうちのせまい庭に
木の芽がちょっぴり芽をだした。
このごろ　あったかい日が続いたので
木の芽が少し青くなってきた。
おかあさんが植えた
赤い実をつけた木が
冬ははっぱが　ちっともなかったのに
三日前から　ちいさいはっぱがでていた。雨がふったら　また大きくなった。
ほんとうの春がきたようだ。

動かないでジーッとしている子が窓から見える木の芽の少しずつの成長を丁寧に見ているのですね。

おじいさんのこと　　晃

おかあさんからきいたことだけど
「おじいさんは　お肉とか野菜とか魚が好きだから　じょうぶだ。」って言った。
おじいさんの年は七十三才で年中東京とか行っている。
長野も行ったし、福島も行ったし、茨城も行ったし、北海道も行ったし、沖縄も行ったし、千葉も行ったし、神奈川も行ったし、青森も行ったし、九州も行ったし、埼玉も行ったし、広島も行ったし、

山口も行ったし、新潟も行ったし、京都も行ったし、四国も行ったし、島根も行ったし、日本全国行っている。
僕の家に来て、そばをうまそうに食べて帰ってゆくおじいさんは、よく日本全国行けたなあと思った。

晃はおじいさんが遊びに来るたびにする旅話が大好きだったのだろう。目を輝かして聞いているだろう。自分はどこにも行っていないけれども、自分で体験したように書いている。そしておじいさんの強さ、逞しさすごさに憧れている晃。素直に生き生き書いています。

私は子どものころ、都道府県や地図を、テストのための暗記学習のように捉えてやっていました。でも、この子の地図には生きた実感がこもっています。例えば、「福島も行ったし」の中にはおじいちゃんが福島に行ったときにはこんな話をしてくれたんだなぁという思いと一緒になっている具体的な福島が見えます。こういう話の出来る晃って、どこからこういう力が湧いてくるのだろうと思いながら、すごいなぁと思いました。

はいはいのこと　　亜記生

亜記と森健のはいはいは目が回る。なぜかというと、頭が上へ上がったり下に下がったりするから目が回る。はいはいをやりすぎるとはいはいができなくなる。このことは長いはいはいをやってわかった。それを知らないで、訓練士さん達は「どんどんはいはいしろ」という。だからはらがたつ。はいはいを全然しなくても、はえなくなる。だから、休みながらはいはいをすればいい。わかったか。はいはいをしていると、いろんな物が見つかる。だからはいはいはいい。ずっと前にデルタックスの部品が見つかった。せみも見つかった。歩いている人じゃ見つからないような所におっこてた。
だから、はいはいはいい。

すごい主張があると思うんです。自分だってはいはいの状態になったことをいいなんて思ってないし、また出来なくなったと思っているわけです。そういう中でも、自分の眼で生活をきちんと見て厳しいからこそ自分の生活を大事にしている。それをどうやって支えていくかの術を知っているような気がするのです。
はっきりした主張があってすごいなと思いました。

桑の木

五年　一夫

桑の木は　きずだらけだ
切られ桑三郎だ

桑三郎は
そうかんたんには　死なない
心の底から
生きよう　生きようと
思っているからだ

桑は強い
切っても　切っても
また　のびる

やっぱり
桑は　強い

この「桑の木」という作品は、学習発表会というのがあって、校内展覧会のようなものですが、クラスごとにいろいろな作品を貼ったりするのですが、私は２月なので桑の木を描かせたいと思ったのです。脳性マヒで家から通っていないマーちゃんのお家は養蚕農家を止めるというので桑の木を掘り返していました。これからは桑の木が見られなくなる。桑の木って、春に芽が出てくる瞬間がとってもきれい。その桑の木が大好きだし、芽は固いのだけれど、あんなに切られて小さいのだけれど、春になると芽を吹いてくる。あの桑がいいなと思っていたので絵を描かせたいと思っていました。掘り出してきた桑の木をひっくり返らないように椅子に寄りかからせて鉛筆のデッサンを一週間描かせました。そしてその後に、「絵と一緒に桑の木のことも書けるといいな」と紙を渡して「桑の木の詩を書きな」と言って書かせたものです。

いつものように、職員室に持っていって「いいだろ、いいだろ、一夫が書いたんだよ」といってみんなに見せたのです。そしたら「いいねぇ！」って言ってくれたのですが、私は一夫が書いたからいいと思って見せたので、詩の中身がどうこうとはあまり考えていませんでした。ところが、作文のサークルで紹介したらみんなが口々に「良い」と言うのです。顧問で詩人の木村次郎さんもすごいといってくれました。そんなにいいのだろうか。私は分からないまま、それでも一夫には「みんないいと言ってるよ」と伝えました。

ところが半年後、母親が新品の軽自動車に乗って迎えに来たのです。まだそれほど車を運転する人が多くない頃でした。私は思わず「すごいんね。免許を取って車を買うなんて！」と言ってました。「いえね、一夫に一度でいいから海を見せてやりたくて…」というのです。一夫は教室の端っこでデルタックスで黙々と遊んでいたのですが、パッと顔を上げて「オレはそう簡単には死なねぇぞ」と言ったのです。その言葉を聞いてハッとしました。半年前に書いた「桑の木」の「そうかんたんには　死なない」と同じだ。一夫がいつもいつもハイハイしながら、いや、いろんなことをしながら心で発し続けている言葉だったのです。あの言葉は自分の身体を通した魂の叫びだったんだと初めて気づきました。そう思ってみると「桑の木」は確かにすごい詩だったのですね。

一夫は高等部に入学せずに早く死んでしまったのですが、私はこの「桑の木」に支えられて仕事をしてきたし、いま私がいるのもこの詩が心の支えになっているのです。

この頃になると、子どもたちはまったく喧嘩をしなくなったし、「せんせい！これやるべー」とやりたいことを次から次へと出してくるようになりました。

「あした、日曜日でやだなー」というのです。「みんなで日曜も学校へ来るか」「家を1軒買っちゃおうか。七人の館だ！」なんて言い出す子もいました。（大笑）

「なんでケンカしなくなったの？」と聞いたら「もっとまともなことがしたくなったんだよ」とこうなんです。それじゃぁ、私はまともなことを教えなければ(笑)、まともに生きていなくっちゃとやる気満々でこの子たちと過ごしました。

5.響きあい

(1)物語絵「ふわり大男」 1998 年～

平野:この後は普通小学校へ移られて障害を持った子とはいったん離れることになるのですね。普通学校でも別のことをするという意識はなく、一貫したお仕事を続けられたと伺っていますが、時間の都合で間をちょっと飛びますが、現在に至るその後のことについて伺いたいと思います。

関山: 8 年で異動するようになっており、普通小学校へ転勤しました。私は、この子たちが外へ出て行けないのだから、私が出て行って君たちとやってきた同じやり方で同じ心で普通学校でもやるからと気負って宣言しました。19 年普通学校に勤務しましたが、同じ気持で通したと今も思っています。ところが、昭和小学校で普通学級をもっていたときのことです。特学に暴れまわる子がいて、私のクラスが親学級になっていたのですが、こちらに来たくて来たくてしょうがなかったようです。そのくせ、来ると手の付けようのないくらい暴れまわるのです。磁石の玉を黒板に投げつけたり、授業中に教室中を走り回り、つばをかけたり筆入れを取って隠したりして、1 分たりとも目が話せなくて授業にならないのです。

平野:先生が黒板に書いているときにですか。

関山:そうなんです。ところが、国語の授業で「つり橋わたれ」（長崎源之助　原著）の授業をしているときでした。そのときだけ彼はピタッと座ったのです。そして、寂しさのあまりトッコが「ママ、今何してるかな？はやく病気、直らないかな・・・。ママーっ！（ママーっ、ママーっ、ママーっ・・・）

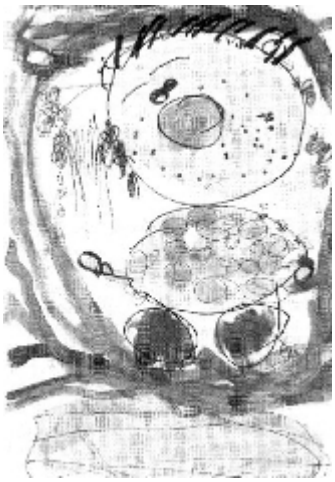
トッコが山に向かってさけぶと、いくつも声が返って来ました。トッコは、うれしくなって何度も何度も、よんでみました。ヤッホー！（ヤッホー、ヤッホー・・・）あんた、だれー！（あんた、だれー・・・）という場面があるのですが、そのとき「わかるー」と叫

んだのです。彼は１時間座って授業に参加できたのです。そうか、彼はお母さんとの関係に複雑な思いがあって、意地を張ってしまうトッコの寂しい気持が分かるのだと思いました。自分もトッコも意地っ張り同士、それが重なり合って気持が分かったんでしょうね。

職員室にもよく暴れこんでくるのですが、どういう訳か、私の言うことは聞くようになったのです。「何秒以内にこれ捨ててきて」というとゴミ箱に捨てに行って、息せき切って戻ってくる。

たまたま、“特学”（現在の特別支援学級）の先生が退職され、後任を決める段になって、「彼は先生の言うことだけは聞くのだからやってくれないか」といわれ、引き受けさせられてしまいました。

次の年には一年生に伸ちゃんという自閉症気味の子が入学してきました。しゃべるのはオウム返し、紙を渡すと左右に振るだけ、絵を描くとき、クレヨンの色の名前は知っているのですが、口を「赤」で描くことは分からない。紙に人の顔らしい丸を書くのですが、放っておくと、ぐるぐる丸を描きまくって、真っ黒になってしまう。手が止まらないのです。ですから、適当なところで「あっ、出来上がった！」と取り上げなければならない。でも、そのうち、顔というと○で止まるようになりました。



一年生の２学期に物語絵「ふわり大男」に取り組みました。何度も何度も読み聞かせしたけれど、伸ちゃんには興味のないことなのか、話の筋もよく分かっていないようでした。「大男だよ。小鳥さんと空を飛んだんだって、良かったね。いいな、いいな。お顔描こうね。」と私が言うと、伸ちゃんもオーム返しで「大男、いいないいな。」と言いながら、条件反射のように紙に大きな丸を書きます。そして耳目口鼻毛まで一気に書いたので、紙をずらして半分より下も空いていることに気づかせて、「大男のおなか」というと、お腹らしい丸を書く。次に「大男のお手々」なんて言いながら「最後に小鳥さんが髪毛をひっぱってくれたよ」と指示したのですが、言われていることが分からないのでしょう、紙の端っこに点々と、その下に棒線を雨のように書いたのです。そんなやり取りをしながら、毎日４、５枚ずつ描き 15 枚にもなりましたが、どれも同じような絵でした。

あるとき、急用で教室を空けたとき、五年の暴れん坊君が続きを言ってくれ、青空まで描き、色もぬってあったのです。私を見るなり「描かせておいたよ」とすました顔で言いました。それを見て、これは伸ちゃんの手を借りた

彼の絵だと思いました。とすれば、今まで描いた 15 枚の絵は伸ちゃんの手を借りた私の絵？

翌日、私は「伸ちゃんの描きたいようにどうぞ。」と言って、用紙も縦でもなく横でもないように降らし、描いてもらったのです。これを見たら、私が誘導して描かせた絵と較べ、足も胴体もない顔だけの絵ですが、生き生きとしているし、小鳥さんらしい丸がたくさん取り巻いて、大男をひっぱっている様が良く分かる。「この方がよっぽど空飛んでる！ふわり大男だ！」と感じました。手があったからって、大男になるわけじゃない、人間らしい身体になるわけじゃない、きちんと形ばかり整えたって絵になるわけじゃないということを伸ちゃんに教えられたのです。

手があり足があり、色も塗り分けられて、下に山があれば空を飛んでいる情景を表現できると思っていた私のは絵でもなんでもなかったのです。大男の人柄をまるごと捉えてよろこびを表現するのことが絵のはずでした。

算数をやっているときでした。1 は分かるのですが 2 は分かりませんでした。それでも一週間かかって何とか 1 と 2 が分かるようになりました。1 個ずつ 2 本の手でつかめるからだと思うんです。3 になったら全然ダメでした。3 は手に持ちきれないので「いっぱい」。いくら 3 だといっても 3 の概念が分からないようです。はっと気づいたのが、1 が分かって 2 が分かるのだから、それを手がかりにすれば分かるかもしれないということでした。それで、2 のカード＊＊に＊1 のカードを合わせたのが 3 と言ってセロテープでくっつける動作何度も何度もやり、＊＊＊が定着しました。次はとても楽に ＊＊＊も＊ ＊ ＊も＊＊ ＊も、カードを斜めにおいても一目で 3 と言えるようになりました。

「じゃあ、次は 4 ね」。ところが私はまたしくじってしまいました。3 が分かったのだからこれが 4＊＊＊だよ、といって段階を飛ばして 4 を渡してしまったのです。そしたら、全く分からなくなってしまいました。3 も分からなくなってしまった。私は「どうして？昨日できたでしょうに！＜机を平

手でパンと叩きながら＞伸ちゃん！」と怒りを含んだ口調で叫んでしまったのです。そしたら、伸ちゃんが「そんなに怒らなくてもいいでしょ！叩かなくてもわかります。伸ちゃん、出ていきます！」といって教室を出て行こうとしたのです。そして5、6歩行ったところで戻ってきて「先生が出ていきなさい！」と言ったのです。（爆笑）いつもオウム返しの伸ちゃんが唯一オウム返しでなかったのがこの言葉でした。びっくりしました。私はわれにかえり「そうだよね。伸ちゃん！ごめん！」と謝りました。座ってもらって、３のカードに１のカードを増やしてくっつけ作業を何度も繰り返し、「３個に１個ついたのが４ですよ、３個に１個足したのが４ですよ。」が分かるまで何度もやって、確認できたところで「4というのはこれですよ。」と言いながら、３と１をバラバラにしたり、「斜めになっても、こうなっても4ですよ」とやったら、今度はスーッと入っていったのです。４が確実に入ったのです。ほんのちょっとした手順の違い、ちょっと省いただけで混乱させてしまい、怒られてしまいました。当然ですよね。後々分かったのですが、伸ちゃんにとってとんでもない理不尽なことがあったとき、オウム返しにならないで正常につながって、正常に話せるということでした。不思議なことですが、時にはそういう刺激を与えることも大事なのかなと思ったものでした。ところが、席について３と４を始めたときにはまたオーム返し語になっていました。（笑）

そういう伸ちゃんとの出会いなのですが、彼は今渡良瀬養護学校の高等部１年生です。週１回、私の家に来て一緒に漢字の勉強をしています。お父さんやお母さんの名前を書いたり、すごく一生懸命勉強しています。このようなゆったりと流れる時間の中で昭和小学校の特学を担当し、伸ちゃんとの丁寧に触れあい、丁寧に話を聞けることは自分自身をゆっくり自省できるという意味でも、私にとってかけがえのない職場になりました。

(2)かえるはなえる 2002年～

関山：で、最後の職場になった広沢小学校では“特学”を希望して転勤し、４年間在職しました。

広沢小２年目のときでした。琢ちゃんという自閉症の子と出会いました。一年生です。この子は、就学判別委員会では養護学校を勧められたのですが、地域の特学に入れたいという両親のたっての願いで、入学してきました。入学式のときも動き回って落ち着かず、ねっころがったりぷいと出て行こうとするので、隣にいた私が足をひっぱると、椅子の下にもぐりこむ。会話らしい会話はなくて、「お家へ帰ります」を何回も繰り返していました。

一方、四、五年生３人とは山村暮鳥の「風景」という詩で授業をしました。学級の花壇に菜の花が真黄色に咲き誇っ

ていたので、始業式はこれで行こうと決めたのです。

『風　景』　　山村暮鳥

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
かすかなるむぎぶえ
いちめんのなのはな

いちめんのなのはな（６回リフレイン）
　ひばりのおしやべり
いちめんのなのはな

いちめんのなのはな（６回リフレイン）
　やめるはひるのつき
いちめんのなのはな。

という詩です。

同じ言葉が続くので、四、五年生たちは「読める読める、こんなのやさしいや」と言いながら「いちめんのなのはな、いちめんのなのはな…」と読みました。読み終えたところで「なのはなって知ってる？あそこにあるよね。ちょっと持ってきて。」と言ったら、たかちゃんが菜の花の花びらを１枚だけ持ってきたのです。「これも菜の花だけど、もっと花をもってきてよ」と言ったら、ゆう子ちゃんが行って、ぐさっと根っこから引き抜いてきました（大笑）。「アリャラー、大胆ね！」と言いながら、「いちめんのなのはなというのは、これが一面に咲いているんだよ、校庭中まっ黄色になるんだよ、広沢中がみんな菜の花なんだよ、目をつぶってごらん！見えるだろう。一面の菜の花が…目をつぶって読んでみよう！」。そして「これからこの詩の勉強するけど、明日はまた違う菜の花畑が見えるかもしれないよ。」と言って始業式の日の授業を終えました。

翌日から、琢ちゃんを交えて授業が始まりました。でも、琢ちゃんは教室においてあったトランポリンでピョンピョン跳んでいるか、時計が大好きで、教室を出て行って玄関に掛けてあるメロディー時計の下に行ってずっと見ているかを繰り返していました。ところが、みんなが「いちめんのなのはな、いちめんのなのはな…」とはしゃいで読んでいると、トランポリンでピョンピョン撥ねながら、小さな声で「イチメンノナノハナ？」とかすかに言ったのです。そしてヒューとまた時計のところに出て行ってしまいました。

自閉症の子は普通、友だちの言っていることを聞かないといわれているけれど、聞いてるじゃない。しかも、その言った言葉が自分にとってうれしい言葉として受け入れたから自分で発したわけですよね。この子、仲間の言葉を受け取っている。言葉が分かる。こういうふうに感じ取れるんだったら教育できると思ったのです。

トランポリンに戻ってきたとき、「琢ちゃん、すごーい。みんなにあげたのと同じ紙を上げるよ」と紙を渡したのです。そしたら、プリントされていた詩をすらすら読んだのです。字が読めていたのですね。そのとき、一瞬でしたが席につけました。私は、琢ちゃんはこの教室で一緒に学習できるなと思いました。でも、その後も一日中時計の前に行ってました。１度だけ給食のコンテナが運び込まれるエレベーターに行ったことがあるので、「ここは荷物を載せる場所で子どもは近寄ってはいけません。絶対ここへ来たらダメだからね。」と厳しく注意しました。そして、介助の方には「この子は外には行かないし、心配ないですから彼に知られないように教室から時々そっと見ていてください」とお願いしました。ところがある日。校長先生が「もう一つ理科室にあって使ってないから教室にもって行ったら…」と言って下さり、メロディー時計を届けてくださったのです。私はそのときは深い考えはなかったのですが、「せっかく持ってきて頂いて悪いのですが、お返しします」と言って持って帰ってもらいました。後でゆっくり考えたのですが、メロディー時計を教室に置くことは、教室＝メロディー時計となってしまい、たしかに琢ちゃんは教室にいるようになるだろうが、琢ちゃんに教室がどんなところで何をするところかを教えられなくなってしまうと思ったからでした。５月頃から教室にいる時間が少しずつ長くなってゆき、一年経ったときには長い休み時間のときだけになりました。

そのきっかけになったのが『かえるはみえる』(まつおかきょうこ作　馬場のぼる絵)という絵本でした。

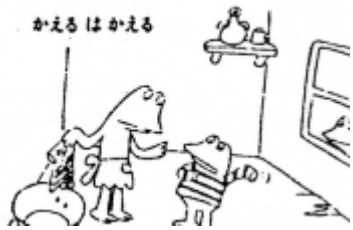
かえるがみえる、かえるにあえる、かえるがかえる、かえるがふえる、韻をふむことばの連続にユーモラスな絵がついていて、日本語のおもしろさに出会える、ことばあそび絵本の傑作ですね。

琢ちゃんは自分の意志でしっかり物を持つということがなくて、何かふーっと触って、ふーって離すという物とのかかわり方でした。

介助の先生が本箱を整理してくれていたときです。いつも通りトランポリンをしていた琢ちゃんが、自分で本を取り出し、ピョンピョン跳びながら本をしっかり持っているのです。そして、急に電気を消しに行ったのです。「やあね、琢ちゃん電気を消すなんて、みんなお勉強してるんだから…」と言いながら電気をつける。琢ちゃんは本を持ちながらトランポリンをして、また電気を消しに行くのです。それを何回も繰り返しました。私はごっこ遊びか意地悪遊びの感覚で喜んでいると思ったのですが、よくよく見たら、私が電気をつけると消しに来てトラ

ンポリンに戻りニヤっと笑う瞬間と最後のページに眼をやる瞬間があるのです。そこで「琢ちゃん、なになに？見せてちょうだい！」。見ると左側に２匹のかえるがいて、右側が最後のページなのですが、窓が真っ暗になっていて“かえるが消える”となっているのです。それでこの本がお終いになるのですね。それで、

かえるが消えるということを電気を消す動作で確かめて、本を閉じて本が終わったというふうにして、私が電気をつけると、また本を開いてかえるが見えるところを出す。“きえる”という言葉をカエルと一緒になって確かめて楽しんでいたのでした。“きえる”という言葉をこんなふうに楽しめるなんてスゴーイ！「そうだ、琢ちゃん、その本貸して！」と言って、職員室で拡大コピーをして画用紙のこっち側に見えているかえる、反対側に真っ暗な家のほうを貼って、四角いマスを書いて「かえるはきえるだね。じゃぁ、書いてごらん！」と言って書かせると、弱々しい字ですが、“かえるはきえる”と書きました。そして、私と一緒にカエルに色を塗りました。初めて席について作業したのです。この子は字が書けるじゃないか。書く気になれば書ける！そしたら次の日、もうこのページは開かないで次のページに進んだのです。面白かったのは、“かるはかえる”で、ひっくり返っている絵、そしてお家に帰る絵がありますが、洋服を着替えている、こういうページになったときです。琢ちゃんは潔癖症的なところがあって、少し汚れただけで、みんな脱ぎ捨て真っ裸になってしまうことがあったり、家でオシッコしにトイレに行くのも真っ裸で行く。学校では全くトイレには行きません。学校のトイレはくさいから行かないのです。そういう潔癖症なのにどういうわけか体育着に着替えるのは嫌がる。体育は普通学級と一緒にやるので着替えさせようと二人がかりでやるのですが、暴れまわって全然着替えさせない。しょうがないから、体育着に似た白いＴシャツと紺の半ズボンを体育のある日は朝から着てくるようにしました。“かえるがかえる”の場面ではひっくり返って汚くなる。汚れた服を家に帰って着替える意味は分かっているのです。でも、体育に行くのに体育着に着替える意味は彼にはないのです。汚れたわけではありませんから。だから着替えないし、何で無理やり脱がされるのかも分からなかったのでしょう。しかし、このページに来た途端、ひっくり返っては、すんなり自分で脱いだのです。（大笑）着替えは体育着しかありませんから、自分でロッ



カーに行って体育着を出してきてすんなり着替えたんです。体育着が嫌いだったわけではないのですね。それから、１日中着替えの繰り返しです。何度も着替えて楽しんでいる。だから、体育の時間の直前にこの本を取り上げれば着替えたまま体育の授業にいけるのです（納得の大笑）。それから“かえるもなえる”という難しい言葉のページがありました。これをやっているときに、琢ちゃんは長縄跳びの紐をもってきて、この絵とそっくりの格好をしていたのです。私は「おっ、今日は次のページに行ったな」と見て楽しんでいました。私は四、五年生と『ごんきつね』（新美 南吉 作）を読む授業をしていました。そしたら、マーちゃんが急に、目を大きく見開き、泡を飛ばさん限りの口調で「先生、琢ちゃん間違っている！」と叫んだのです。この絵本には兵十が縄をなっているシーンが描かれており、部屋の傍には藁が立てかけてありました。

それを縄にしていくわけですね。

それを見た途端に「琢ちゃんまちがっているよ。琢ちゃん見てごらん。これがなえるってことだよ。植物を変身させることなんだよ。琢ちゃんのは縄跳びの縄になってるのをもってるだけだから、それはなえるって言わないよ。」と挿絵を指さして琢ちゃんに説明し始めたのです。琢ちゃんはキョトンとしてすぐにいつもの時計のところに行ってしまいました。私は、教室で繰り返し繰り返し“なえる”格好をして楽しんでいるだけで十分と思っていました。でも、それは琢ちゃんに任せていたというか、放り出していたのですね。マーちゃんに教えられて、本当に“なえる”ということはこういうことなのかということを学ばしてやらなければと思いました。「琢ちゃんごめんね。先生が間違っていました」と謝りました。翌日、学校の近くの農家にお邪魔して、刈りたての藁をもらってきました。そして、教室中藁だらけにして縄なえをしたのです。みんなでしたのですが、よごれるのが嫌いな琢ちゃんは全然触りもしないで、みんなの周りを大きく回って出て行ってしまいました。でも、小さい声で「みんなでなえる、みんなもなえるね」と言ったのです。自分の言葉でみんなの動作をきちんと言葉で言えた！言葉をただオーム返しに繰り返すだけでなくて、みんながやっていることを受け入れてそれを表現することが出来た！それはマーちゃんのおかげであり、藁のおかげであり、五味太郎さんの絵本のおかげであっ

たと、教材ってすごく大事だなぁと改めて思いましたね。

また、三学期のあるとき、漢字を教えたときです。“学校”という漢字を教えたのです。で、私は欲をかいて短文作りに取り組んだのです。短文と言っても分からないですから、学校と書いて「続きを書いてごらん」と言ったのですが、それを理解させるだけで 20 分はかかりましたかね。例を言ってしまうとその通りに書くだけでオーム返しと同じことになってしまうので、ただ「さっ、続きを書いて」と学校の下のマス指差すだけです。そして、20 分後やっと書いたのがこれです。学校へいくの？です。これを見た途端に、あれ？普通の子だったら学校へ行きますとか行ったとか書きますよね。なんで疑問形なの？　？マークも知っているんだ。なんでなの？と答えが聞きたくなる文ですよね。それで、「続き！続き！」と催促したら、今度は 5 分くらいで一気に書きました。（笑）

> はい、学校へ行きますよ。学校へ行きましたよ。学校へばいばいするのじゃ。

スッキリした文ですね。“行きますよ、行きましたよ”は自分の意志で学校へ来ていることのようです。“ばいばいするのじゃ”は何か学校へ来て偉くなったみたいです。学校というところは何か偉くしてくれる場所、そして自分でけじめをつけて帰るのだという気持の出ている文です。そういうふうに捉えていたことを知り、素敵な学校だと思いました。短文を作ったことには意味はないけれど、こういうふうに“学校”という漢字と学校に意味と内容を捉えて、自分の言葉として使っていくというところがうんと大事なことなのだと思いました。「表現」というのが校内研修のテーマだったのですが、低学年ブロックでは「これこそ表現でしょ」といってみんなに宣伝したのです。そしたら、低学年の先生方は「そうですよねぇ」と行ってくださったのですが、高学年の先生方には「そんなことやってる時間はないですよ」と一蹴され、価値あることとは誰も認めてくれませんでした。内心では「これこそが大事な表現で学年や漢字の量の問題ではない！」と言い張っていました。

そんな琢ちゃんもあるときパターンが入ってきてしまいました。機械とかコンピュータに強い子なので、保育園のときはよく職員室でパソコンを操作するのを傍でずっと見ていることが多かったそうです。家でもおばあちゃんがパソコンゲームを買ってくれたらしく、その影響だと思うのですが、連絡ノートに今日のことを一行日記のように書くことを勧めていたのですが、

> ぼくとおはなししよう。マー君はぼくのことすき？1すき　2きらい　3どっちでもない。マー君はきらいだって。そうかー。どうしたらすきになってくれるの！

こういう文だけになってしまって、マー君の好きなものが変わってきたり宝探しゲームになったりするだけでこのパターンがしばらく続いたのです。どうしてこう書くのだろうと疑問でした。そしたら、そういうゲームがあるらしいと分かりました。彼はそれを利用して楽しんでいたようです。で、このパターンを消すには頭から書いてはいけませんというのは簡単ですが、それでは本当にパターを打ち消すことにはなりません。パターンを打ち消すにはこのゲームに打ち勝つような強い刺激があれば変わる。でも、何が強い刺激になるのかが分からない。

マー君に向かって口で質問するよう指示するとマー君は「好きだよ」と答えました。ところが琢ちゃんは「マー君は嫌いだって」と書いてしまうのです。そこは「ウソでしょ」と何度もやり取りを繰り返えさせてウソを描いてはいけないということだけは守らせました。

2週間後、町の温水プールに行きました。その帰りバス待ち40分を待てなくて、琢ちゃんの「帰ります、帰ります」が始まってしまいました。それで歩いて帰ることにしました。40分くらいかかります。途中に錦桜橋という大きな橋があります。ところが橋が工事中で欄干から川の流れがよく見えたのです。琢ちゃんはこの橋を歩いて渡ったことがないようで、よけい川の流れが怖かったようです。そしてその日の日記からなんとあのパターンが消えていました。

プールのかえり　あるいた。ずっとあるいた。はしの上をあるいた。あるくとはしも上は　こわかった。高かった・見えた・川が見えた・石が見えた。土手をあるいた。

よーいどんをしたよ。ぼくのかち。琢がおこった。二かいめはマー君がかったから、マー君をなかした。

こんな競争をするなんて考えられもしないのに、橋の経験が怖かったことと土手を長く歩いたときにマー君はでれでれでれでれ歩いたのに対して琢ちゃんがちょっと小走りに走って、勝手に「勝ち」と言ったんです。すごく喜んだものだから、今度はマー君が悔しがって、今度走ったらオレが勝つといって本気で走ったのでマー君が勝ったのです。琢ちゃんは負けた経験もないものだから、うんと怒ってマー君にかかっていったのです。マー君が泣いたのではなく、本当は琢ちゃんが泣いたのです。（笑）琢ちゃんの負けず嫌いの現われなんでしょうね。だけど、友だちの刺激、橋の上の恐怖という初体験の刺激がパターンを消したんですね。次の日からこのパターンは全くなくなりなりました。

「雨と水玉」というのは、やはり琢ち

雨がふっている。
雨がふるよ。

ゃんが書いた詩なのですが、

＜朝自習のときここまで書きました。私がそれを見て、“雨がふるよ”って優しいなと思って、丁度、雨も上がって陽差しがキラキラ輝きだしたので、庭に出て花壇の葉っぱを手でテンテンテンと触ると水玉がコロコロ落ちてすごくきれいだったのです。それで、何回も花壇を回って二人で水玉コロコロを楽しんだのです。そしたらその後教室に入ってきて続きを書きました。＞

水をのんでひまわりさくよ。
まだまだだめだ。
もっともっといっぱいさくよ。
やった　やった　やった　やった
はっぱに水玉ついたよ。
ひかってたよ。
水玉さわったら
うおっー！こら！いて！あい！ふい！
ころころころって
水玉ころがった。

私は“うおっー！こら！いて！あい！ふい！”というところがすごく好きで、私たちは水玉がコロコロ落ちる情景を言うだけなんだけど、琢ちゃんは自分が水玉になってるんですね。だから水玉が“うおっー！こら！いて！あい！ふい！”と叫んでいるんですね。この水玉の声を聞いているところが素敵だなぁと思ったんです。琢ちゃんはそんなふうにしていっぱい文も書くようになったり、ねっころがって歌も全然歌わない子だったのが、歌えるようになって、ステージでも歌えるようになってきたり、もうすっかり時計通いはなくなっていました。みんなの朗読を“イチメンノナノハナ”と友だちの言葉として受け入れた瞬間から彼の響き合いが始まったのだろうと思うのです。『かえるはみえる』という絵本のカエルさんに響きあったり、マー君の“なえるはね！”に響きあったりしてきました。そういう友だちとの響き合い、教材との響き合いの中で本物の言葉、人間としての言葉を獲得して、そして自分の言葉として使いたくなってきた。そういう中で、他人とは目を合わせないし関りたがらない琢ちゃんが、他人と関わっていく楽しさを知ったのではないかと思います。

(3)ともだちとのかかわり

関山：最後に「ともだちとのかかわり」ということを話します。三年生の冬のことです。りょうちゃんという同じ年で、普通学級に籍を置いているけれども、算数と国語を特学に来て勉強している子がいました。あるとき、りょうちゃんに待っててもらって一緒に下校したことがあります。中々帰宅しないので車で様子を見に来たお母さんがボーっとしている琢ちゃんを見つけて車に乗せようとしたのですが、要領の得ないことをしゃべっていて分からない。空っ風の強い

日でしたが、帽子も手袋もなくなっている。何かあったらしいのだが分からないのでと学校につれてきたのです。りょうちゃんの家に電話をしてもまだ帰っていない。後でりょうちゃんに聞いてトラブルの内容が分かりました。次の日に琢ちゃんが書いた作文です。

ぼうしとてぶくろがとんでいった。
おととい僚太といっしょに帰った。
川の所で僚太が怒った。
「ぼうしかして、手ぶくろかして」
って僚太が言った。
ぼくはぼうしと手ぶくろを取った。
僚太が手ぶくろとぼうしを取った。
北風がビュ　――――――――――
って吹いた。
そうしたら、ぼうしと手ぶくろが飛んでいっちゃった。
川へぼうしと手ぶくろが落ちていっちゃった。僚太は川へおりた。
ビシャ　――――――　ンってなった。
くつがびっしょりぬれた。
まだ取ってたんだね？
ちょうど母がいた。
「乗りな」
って母が言った。ぼくが
「ぼうしがない！」「乗らない！」
って言った。
だけど乗ったんだよね?
僚太は川にいたんだ。
僚太にごめんね。
僚太をおいて乗ったから、ごめんね。
待ってなくてごめんね。
こんど待ってるよ。
僚太も
「ふざけてごめんね。」
って言った。ぼくは
「いいよ。」
って言ってなかなおりできたよ。

やはり、こういう事件が起きないと他人との関りは出来ていかないと思うんですよね。
私は「川へりょうちゃんが降りて行って、もし石にでもけつまずいて怪我して川から上がって来られなかったらどうするの？りょうちゃんのことを知っているのは琢ちゃんだけなんだよ。琢ちゃんが黙って帰っちゃったら誰も知らないんだよ。りょうちゃんはどうかなっちゃってたかもしれないんだよ。それを人に伝えられなくてどうするの！」とつよく注意しました。でも、こういうことを言っても琢ちゃんには分からないだろうな、琢ちゃんには琢ちゃんの理屈があるのだろうと思いつつも叱っていました。やはりりょうちゃんを思う気持ちが人に伝えられなければ、友達を思ったことにはならないということを言いました。いつにない真剣な要求から、琢ちゃんもりょうちゃんを待たなければいけないということが分かったようでした。こういうふうにして、トラブルが一つ発生するごとに琢ちゃんが他人との関りをいっそう強めて、また

一回り大きくなっていくように思いました。トラブルがないように、ないように生活させたのでは大きくはなれない。気づけないことっていっぱいあるなって思うんです。

(4)ニコニコ笑っている顔が好き

次の「くさいろのマフラーを読み終わった。」は後藤隆二さんの絵本から文字だけプリントして授業をしたのですが、琢ちゃんがこんなに読み取れたことに安心したものです。

くさいろのマフラーを、読み終わった。

コウ君は心の中で北風に言いました。そしたら、北風が、

「友達になってね。」

「ぼくが春を連れてきてあげたんだよ。」

「友達になってうれしいよ。」

「よくがまんしたね。」

「一年生なのに、えらいね。」

「よかったな。」

「北風が笑ってコウ君に、がまんできたね。」って言ったよ。

コウ君は、寒くてもさびしくても、こわくても、草色のマフラーをしっかり持っていたから、がまんできた。お守りだからです。お母さんが夏から編んでくれた。お母さんがコウ君のことを心配してたから、マフラーを編んだ。編みながら「春までがまんするんだよ。」

コウ君は、一年生なのに、どんなにしばれる日でも、どんなにふぶきのふきあれる日でも、学校に通えるかな。心配だ。一月の、お正月にも帰ってきませんでした。コウ君はがまんして、いられるかな？

夜は北風がおこって、家全体がギシッギシッときしむけど、こわくて泣かないかな。コウ君はねむれるかな。心配だ。

学校で、楽しいことがあっても、お母さんもはなせなかった。だいじょうぶかな？ねつがでてもお母さんはそばにいてもらえないんだけど、だいじょうぶかな？心配だ。

マフラーにねがいをこめた。

マフラーを首にまいてくれて言っちゃった。

コウ君はなきたいのをがまんした。でも、とうとう泣いてしまいました。それきり草色のマフラーをどこへいったのか見つからなかった。

マフラーがないと見つからなかったらもう、お父さんもお母さんも帰ってこないような気がして、コウ君はとうとう泣いてしまいました。

コウ君をかわいそうと思った。

本当は北風はやさしかった。だって、草色のマフラーをふきのとうの春を連れてきました。本当にやさしかった。春を連れてくれたんだな。

海が光ったような気がした。本当は光ってなかったけど、コウ君とお兄ちゃ

んとお兄ちゃんの友達には、光ったように見えた。

春の色だよ。

お父さんとお母さんが帰ってくる日は、もうすぐです。コウ君、北海道で、芽出した。葉っぱもつけた。コウ君はうれしい。大きくなったね。きっとお母さんはうれしいよね。

これが琢ちゃんの感想文です。私は普通学級の一、二年生で何度もこの作品を教材に使っていますが、これほどきっちり読み取った子はいませんでした。これは 3 月 20 日に書いたものです。最後の最後まで授業をして、これを最後に私は退職しました。最後の日に「先生、泣かないよ。ニコニコ笑っている顔がいいもんね。先生の笑っている顔が好きだよ。琢真もがんばるよ。」っていう嬉しいお手紙をもらいました。

（拍手）

6.ノーマライゼーション

平野：どうもありがとうございました。フロアから質疑を受ける時間も限られていますが、質問、感想、補足などを是非お願いしたいと思います。

河崎さん：先生が桐生で障害児と関っている頃、中央児童相談所に勤めていました。それまでは重い障害をもっている子は学校教育の対象にならないで、家におきっぱなし、酷いのは手首に紐をつけて親が働きに行ってる間は柱に縛り付けられているような事例がありました。そういう子どもを児童相談所としてこれから

は教育を受ける権利があるのだからと施設にお願いしたり、学校へお願いしたりという仕事、家庭調査をして向けるという仕事をしていたのです。その当時は、特学を担当する先生はくたびれた先生がしょうがないので（障害児童と）一日遊んでやっていると思われている時代でした。そういう中で、こういう子どもを学校へやっていいのかなぁとか施設に入れっぱなしでいいのかと疑問を持ちながら、施設に入れたり、施設から学校へ何人も連れて行ったことがあります。私たちは学校現場のことは分かりません。僅かに石井先生が子どもに絵を描かせて、それを持ってきて見せてくれたことはありました。でも正直なところ、そういうことをやってくれている先生もいるんだ位の認識しかありませんでした。でも、今日の先生のお話を聞いていて、こんな教育のロマンというか、そういう先生がこういう活動を、しかも初めて先生になられた方が方法論も分からないまま生徒をまるごと受け止めて、子どもたちを見ながら先生ご自身が教師としてちゃんと成長な

さっていくという感じがしたものですから、教育の場というのは本当に素晴らしいものだと心から思いました。今はそういうものに逆行するような動きがあるのは残念ですが、「子どもの権利条約」の世話人をしていて、一昨日、関山先生はいい話をしてくれるよと聞いたものですから、今日来てみて本当に良かったです。自分たちのやっていた仕事は連れて行くことだけでしたが、お願いした先でこれほどの教育をしていただいていたこと、そういう現場があったことを知って本当によかったと思いました。有難うございました。

都木さん：ちょっとショックだったのを覚えています。私も借りた蜂の巣だったのです。関山さんは今でもエネルギッシュですが、当時はもっともっとエネルギッシュな仕事ぶりで、私たち後輩はとっても刺激を受けました。その頃って、教室から一歩でると話題は自分の持っている子どもたちの自慢し合いっこだったのです。こんなこといったよとかこんな絵を描いたよ、こんなことが分かるようになったよ、算数教えたらこういうことをしたよ、多分アピールしなければ障害児の発達は緩やかなところがあり見えづらいところがあるので、自分が担任として見つけられた、関れた喜びみたいなものをお互いに自慢しあう教師集団があったと思います。最近はだんだん自慢しあう時間も少なくなってきて、淋しいなと思っています。あの頃は寝ても覚めても子どものことしか話さなかった時代を今懐かしく思い出しています。

関山：二度目に第一養護に戻ってきたときには若い教師が増えていました。私が教員になりたての頃は、教頭を管理職にすることが話題になっていて、授業を持つか持たないかで職員会議で議論されたことを覚えています。戻ったときには教頭は管理職になっていました。（養護学校には）学部主任と副主任がいて、学部主任は上から決められ、副主任は互選でした。その頃の第一養護は大所帯になっていましたので、若い教師たちの意見が通りにくくなっていました。運営委員会には副主任が出られるので、若手の代表を副主任に選ぼうということになって、若手の中では年上の私が候補者になったのです。年上と言ってもまだ 28 歳でしたが、もう年寄り扱いなんです。（笑）私は子どもを産んだばかりでしたから、保育園への送り迎えがあり大変なときだったのです。でも、若手を出さなければということで、「あんたは経験もあるし、通りやすいから副主任やってよ。私たちが推すから。忙しいときには保育園のお迎えもやってあげる。」というのです。で、副主任になりました。

推すからと言っても大抵は口約束で大抵は実行がともなわないのが普通だと思うのですが、会議が長引くと校長室に電話がかかってくるのです。「まだ終わりそうにない？私が迎えに行くから大丈夫だよ。」と言って、迎えに行ってくれました。そういうことを若い仲間がきちんとやってくれたのです。そういう仲間が第一養護にはありました。

いい仲間に恵まれていたんですね。

平野：伺ったお話が膨らんで具体的にイメージできるお話でしたね。

藤原さん：琢ちゃんとの出会いですが、卒業までの3年間の琢ちゃんの変貌が余りにも素晴らしいので驚きました。

普通は自閉症には先入観が働くのにそれを突破して、普通学級なら通り過ぎちゃうようなこと、例えば“なえる”だとか、数字に関しても1、2、3、4の言葉の違いをスローモーションで納得させてもらったような、言葉の重さみたいなことに気づかせてもらい、素晴らしいことを教わった気がします。親とすると五体満足に生まれればいいという感覚を持ってしまいがちですが、人間の可能性って本当に深いんだなぁということがよく分かりました。それと、関山さんの掘り出す能力がすごいと思いました。

平野：やはり、才能というのはあると思います。＜才能なのかなとフロアの声＞思い入れの強さはすごいと思うし、子どもたちがそこに巻き込まれて反応して響きあっている。相当の思い入れがないとあんなには聞き取れないと思うんです。そういう経験からスタートできたことによる磨かれた能力だと思いますね。

関山：先日平野先生から「どうして桑の木を選んだんですか」というご質問を受けましたが、そんなに深く考えて選んだわけじゃないんです。

平野：深く考えないで選んだ「桑の木」で一週間描かせるということ自体すごいんですよ。理屈ではないのです。

関山：好きだということともう一つ後から理由を探せば、あの子たちのあの状態には「桑の木」はピッタリだったと思わせる何かが働いたかもしれませんが、そのときは、だから「桑の木」を描かせるというふうには思っていなかったですね。

平野：直感的なひらめきみたいなものですかね。「桑の木」に感じるものと子どもたちの姿に感じるものとが、自分の中に響きあうものを感じるからこの実践でいく判断が出来たように思えます。だけど、そういうときに関山さんにはあまり迷いがないんです。そこもまたすごい。

＜同感の声。ちゃんと響きあっていくところが素晴らしいですよね。＞

河崎さん：言葉のしゃべれない、口の聞けない子どもの教育は大変だろうと実感するのですが、私はかつて水痘症の子を持つ親から施設に入れたいという相談を受け、その子の枕元で話をしたことがあります。私は職務柄、親の同意と施設が受け入れてくれるように話をするのですが、そういう立場だけで、その子の気持は余り考えもしませんでした。今だから、もう時効になっていると思うのですが、群馬整枝養護園に入れてもらおうと思って、指導員の先生に来てもらったのです。話を聞きながら子どもの表情を見ていた彼は「今この子を入れたら多分食事を摂らなくなるかも知れない。今は入れないほうが良いと思います」と言ったのです。でも、親のほうは切羽詰っていますので、別の養護施設に入れました。その養護施設も頑張ってくれたのですが、3 週間で摂食障害になってしまい、結局親は引き取って家につれて帰ったら食事を摂るようになった。児童相談所というのは親や施設の都合ばかり考えて、子どもの気持ちを大事にするのを怠ってしまったということを、退職して「子どもの権利委員会」に携わって、学習する中で気づかされました。“児童に最善の～”の基本精神と“子どもの意見を尊重しなければならない”を学習しながら、私は児童相談所時代に本当に子どもに最善を尽くしてきたのか、反省を迫られました。今日、先生のお話を聞いていて、何という仕事をしてきたのか本当に忸怩たる思いですね。いま、学校の先生たちが本当に子どもたちのために最善を尽くしてくれているか、万が一にも上のほうばかり見るようなことはないと信じますが、益々私たちがしっかりしなければ…と思いますね。

臼井さん：私は音楽専科で 3 年間、関山先生が担当していた特学のクラスで火曜日の一時限目に音楽を一緒に勉強していました。関山先生の大きな声に負けないくらいに大きな音を出しましたので、他の方が入ってくると、「なんかすごかったよね、（爆笑）関山さんの大声もすごかったけど臼井さんのピアノの音もすごかったよね」と言われてしまいました。琢ちゃんは最初歌わなかったのですが、「琢ちゃん絶対歌うよ！」と関山先生がおっしゃってて、本当にその時期になったら歌い始めました。体育館の大きなステージで全校の子供たちの見ている前で声は小さかったのですが、とてもきれいな声で歌っていたのを思い出したんです。琢ちゃんのすごいところは音色とか音に対してすごく敏感で、普通の子どもたちよりのきれいな声で歌ったり、リコーダーを吹いたりす

ることが出来て、音楽の時間に普通学級の子たちと一緒に勉強するのですが、見本になるくらいのきれいな音で演奏していました。私はいま別の学校に移ったのですが、琢ちゃんとは時々金管の講習会とかで会うのですが、トランペットをやっていまして、上手になっています。関山先生が琢ちゃんには出来ないかなと思いながらもひっぱっていきながらどんどん伸ばしていくのを見ていましたから、音楽をやりながら他の子に対しても同じように接していこうと思っています。お世話になりました。

畑野さん：私も関山先生とは広沢小学校でご一緒せてもらっていました。関山先生にはいつもいつも情熱的なお話が伺えて、国語の指導でもよく勉強させていただきました。今日は、実は子どもの指導でいろいろ悩んでいることがありまして、何か手立てになるようなことがつかめればという気持で来たのですが、子どもの一言ひとことを大事にしていかなければということやトラブルがないようにないようにしていけば子どもは育たないというのは本当にそうだと思いました。やはり私の考えは間違っていないと勇気付けらました。また、頑張っていこうと思います。

萩原さん：関山さんの実践はかなりいろいろなところへ広がっていく可能性はあるのでしょうか。というのは、私の孫がものをしゃべらないのです。娘を見ていると疲れていて、嫁ぎ先のお義母さんも疲れているし、お義父さんも疲れているし、旦那のほうも疲れている感じがするのです。見ていると、関山先生のお話は希望がありますが、娘の近所にも先生のような方の居られるところがあるのかなと思うのです。その広がりというのはどうやって出来ていくのかなと思うのですが…。

関山：学校には入っているのですか。

萩原さん：だんだん大きくなっていくでしょ。何日か我家に来ていると私も疲れるのです。私も何も分かってはいないのですが、この子は何も分かっていないのでは？と思ってしまうんですね。これが毎日かと思うと関山先生のエネルギーを持続していく力はどこから湧いてくるのか。多分子どもの中に何かを発見していくからだとは思うのですが、娘の場合は“禁止”が多いですね。厳しく「だめよ」言ったりしてね。いまでも体力があるから、これがもっと大きくなったどうなるのか、小学校を出たらどうなるのか、中学校を出たらどうするのかを考えますと…。

関山：それは普通の子でも同じですよね。悩み方は違うかもしれないけれど、それぞれありますよね。くたびれることも同じだと思いますよ。障害を持つ子が将来受け入れられる社会にする運動も大事だと思いますが、それだけではなくその子たちが何が楽しいことなのか、自分も含めてどう生きていくのかが一番大事なことではないでしょうか。その都度その都度ぶつかっては考える、その都度考えるしかないと思うんです。輪もひろがっていないわけではないのですが、私にもこういう機会が与えられていますしね。他のところでも話してという声がありますから、そういうことを受け入れてくれる人々がいますから広がっていないわけじゃないですね。

瀧口さん：先生、いま、正しいのではなく楽しいのかが大事とおっしゃいましたけど、それは大切なヒントですよね。

萩原さん：先生がどこで決断するのか、聞いていましたが、やはり子どもの中に見つけるんですね。

平野：基本的なスタンスが全くぶれていないのです。基本的に子どもから学びながら自分を育てることを一貫して貫き通してきたのは見事としか言いようがない。それでは時間ですので、今日はこれでお開きにしたいと思います。有難うございました。

なお、12 月 13 日（土）の
第 54 回市民学習会戦後教育史を学ぶ
嶋津良夫さんのライフヒストリーを聞く
「ノンポリ学生委員長になる」（後編）
―離籍専従 18 年―多彩な闘いのなかで―
の主な内容は、

1. 降って湧いた？離籍専従
2. 委員長になっちゃった
3. 80 年代の教育臨調・反動攻撃の下で
―「国旗・国歌」強制と公正な教員採用のたたかい
4. 80 年代労働戦線と群馬高教組の役割
―ローカルセンター結成と争議支援
5. 「要求実現こそ」は組合運動の土台
6. 「職場と地域から」を掲げて
―学校づくり、30 人学級、定数闘争
―不当労働行為、人事攻撃、高経附属問題、松本・赤石裁判…
7. 全県の現役・ＯＢ・地域共同の97 年度全国教研の開催
8. 21 世紀の入り口で一喜怒哀楽の思い
9. 未来を信じて、いまできることを

の予定です。